

教授夫人

(9)

訪問

中嶋洋子なかじま よう子

東京外国語大学教授夫人

妻・母・教師と三役をこなして

奈良女子大の学生だった洋子さんが、東京外語大生のご主人と知り合われたのは、六〇年安保斗争の全盛期であった。

洋子さんの物見高く何にでも関心を示す旺盛な好奇心が、時に学生運動へと駆立てたのである。

善段はヴォーボワールを読んだりすることもある真面目な、友人に囲まれた生徒であった。

卒業後まもなく結婚。ご主人が大学の研究所に通う時代の経済的理由と、女性も仕事をもちなくてはの一念で、好きな生物学の教師として東京の公立中学の教壇にたった。

以来、二〇年を数える。

「若い頃は、強烈な個性を与えて送り出すという人間を変えるくらい理想がありました。今では逆に個性を出さずに、人生を一つ上の段階に運んであげたい。私の中に取るものがあれば取って欲しい」と二〇年間に体得した教師哲学を拝聴。幾分ハスキーで落ち着いた口調はいかにも学校の先生らしく説得力と慈愛に満ちている。

現在、中学三年生の担任でもある。

「卒業後何年か経って思いも寄らぬ影響を与えていたと知った時うれいんですね。あの一言が良かったとか。また、おかげで本当に可愛い。昔は、お姉さんみた

いだったんですけど」と二〇年の月日は至るところに示されている。

「子供が生まれてから教育観が変わりました」とおっしゃるが、妻として、母親として、仕事を持つ女性として見事に両立しきっている洋子さんの精神的な生き方はうつくしい。生きている手ごたえが三面鏡のように反射しあつて存在基台を確立している。ご主人の暖かい思いやりがあればこそとれる。

「主人は執念深くて丁寧な生き方を示す人ですね。途中であきらめず周りが見えないくらいに、一つのことをやると徹するんです」私生活でも研究面でも、それは強く表わっていてご主人から多くを学んだそうである。

中嶋教授の書を兼ねた客間は中国関係の本や専門書で埋まっています、書店や図書館にでもありそうなマガジンラック



中嶋嶺雄教授

には学術雑誌が数尽きない。そして、壁からは先生が書かれたという水彩画や油絵が覗いている。

音楽に関していえばクラシックが好みの教授に対して、洋子さんは軽音楽中心だったが、二〇年以上も共に居てお互いの好みのジャンルをいつも聴くようになると自然に影響しあい、互いにお気に入りが増えてくる。そんなふうにも対話の絶えない発展的な御夫妻なのだ。毎年夏になれば御家族そろって信州ま

で行き、キャンプしたり、ゼミの学生を招いては夫人も加わりコミュニケーションをもつ。一昨年のオーストラリア生活を体験した時もアドベンチャーファーマーよりよく、人が行ったことのないような所まで車を走らせ、ワイルドな自然や動物に触れ、縦横無尽に異国の土壌であり余る体験をされた。

底知れない冒険家なのかもしれない。ご主人も、奥様も……。「オーストラリアは本当に良い経験でした。教育に関

しても自由で開かれていますね」としみじみ。

「子供達もようやく手間がかからなくなったところですし、教師生活も二〇年ひとくぎり、また何かやってみたいと思いますね」とすべてが自然でうわついた言葉のない、この女先生は持ちまえる探求心と行動力で着実に人生の相を厚くしていけることだろう。

ご主人談

「見たとおり物事にこだわらない人です。自分が教師のせい、子供達にも勉強」と言わないし、一般の母親像とは異なっているかもしれない。

四人も子供がいて、それでも仕事をもっているんですから、その分こちらにいろいろまわってきて大変ですが（笑）、お互いに自由にやりたいことをやっていますよ」



プロフィール

昭和12年6月6日、東京生まれ。父親の仕事上転校することが多かった。愛知県の時習館高校から奈良女子大にすすみ、卒業後昭和35年秋、中嶋嶺雄氏と結婚。香港、豪州と一年ずつ海外生活を体験。現在都内の公立中学校理科教員。曾野綾子さんの教育論などがピッタリとくるとおっしゃる。2男2女の母。板橋区常盤台在住。

